

華胥國歌合

履軒先生著

原 雅子

翻刻

書誌

華胥國歌合

中井履軒 大阪市立大学附属図書館蔵

森文庫「911・18/N A K / 森文庫」

写本 31丁

表紙 縹色 26・8 cm(縦)×18・7 cm(横)

和本 緑色糸綴じ、表紙右の天と地の部分は濃茶色布覆

半丁 10行、字高 23・0 cm(縦)×15・3 cm(横)

J 1 3 0 9 6 9

1 (オ)

華胥國歌合

れいの華胥の夢路にかゝつらひしに思ひかけぬまろうとたちいて
未にけれ浄右すそのへと神さひにたるはしめハすのこにしりうちかけて
物なといひけニやゝはひのほりて西なる柱によりかゝりてよるつ
ことかたりあハするにもろこしの文なとハさるはかせにてさらにも
いはすあそひのわさもへたなからすなむさてわか國ふりをせち
に心とゝめてのとやかにうちかたらふにいてや哥よミてあハせなむ
判すへき人やあるといふあるしハこの道のいとつたなきいなミて
あるへきをさる夢こゝちにやいとよかめりとて硯とり出てるた
る座のまゝにひたり右をさためて春夏あくれとさえずり

1 (ウ)

出るをかのおひ人なんあやしきゝかねんしわつらふさまも
なくまたいちはやにわれといひ出ることもなくあるしよのよミいて
たるしりにつきて舌ゝにいひ出たる題わかちたるもさらぬもあるし
のなひためらひてうめきなとするおり／＼はこゝよりゐていねふり
をなんしけるひたすら口にまかせていひ出るにこそ五十番

にミちぬやなといふほと入相の鐘にうちおとろきてミれハたき

すさミたる香の烟のゆかしきはかり消のこりてまさしく手に

もちし筆さへ紙さへいつちゆきけむまいてかのおひ人ハその面影

のわすれかたさにつく／＼と思ひつゝくれハかの哥あハせんまのあたり

にいひつ聞つしたるものをたゝ耳のそこにのこりたるこゝちすれハ也

2 (オ)

とう硯ひきよせてひとつふたつとかいつけミれハほと／＼ねんしいた

されにけるひかおほくにや

春 八番

左 主

山のはに霞の衣たちそめて春きにけりとけさハミゆらん

右 客

よしの河岩波たかくなりけり雪の深山に春立らしも

左

霞たにたな引あらず梓弓はるこそいまたミねのしら雪

右

2 (ウ)

あたらしき春はくれとも ふる郷のよしの雪はまた消なくに

左

世中ハ花になるらし春雨のふる郷さへも咲そめにけり

右

中々にくる人たらぬ春雨のたへまをなみの崖のいと水

左

山風に霞の衣ほころひて柳のいとミたれゆくミゆ

右

棹姫の霞の袂うちなひき一単うすきすみの忍の松

左

3 (オ)

桜花にたる春風をそめにけむ花の木立ハ霞こめつゝ

右

鶯のふるすの梅そ咲にける外山の桜いまか散らん

左

さきしよりいくかもあらぬに桜花風まちかほにうつろひにけり

右

移しうへし花の心のねたきかなと山風をさそひきぬらん

左

よしの山花の初雪ふりぬらし空にはれゆく峰の白雲

右

3 (ウ)

心たに桜かもとにまとろまむ花のふききのふりや埋むと

左 若菜

いさや子ら雪か晴まに春日野やとふひにもゆる若なつみてん

右 子曰

梓弓まとゐしてけり小松原ひく手に千代のはるそこもれる

夏 二番

左

うちなひく民の草葉のくもミせて小田の田面を風の吹らん

右

うち出の柳のいろのなひきあひてこの本のミか秋風の吹

4 (オ)

左

から錦しきたる庭のくさくさもなを床夏のなつかしきかな

右

月影をへたてにけりな玉葛木梢に夏のくるとせしまに

秋 八番

左

けさのあさは涼しくもあるか朝顔の花を待出て残る虫のね

右

葛かつらはふほともなき庭もせに秋こそ虫の聲聞ゆ也

左

4 (ウ)

萩か花よもきか露をかこつまに庭さへ秋の野へ二なりぬる

右

道芝の露のゆかりをこをりつゝわか袖の上に月やとるらん

左

秋風の萩ふく夜半ハ長けれど独し結ふ夢そミちかき

右

白妙の霜をたゞミてうつ砧たか手枕の夢かよふらむ

左

ま萩さく秋の錦のから衣すその鹿のたちやわひぬる

右

5 (オ)

むへしこそお鹿鳴なるきのふより崖の紅葉は色つきにけり

左

紅葉はにいま一人の時雨こそ過行秋のかたミ也けれ

右

立田姫手おりの錦ぬきかけてかたミに見よとをきていぬめり

左 海邊月

墨のゑの月ハたとへもかたそきや行あひのまの霜とミるまで

右 同

落かゝる光に波もわかかへり月そよせくる墨江の松

左 湖上月

5 (ウ)

ふけ行やひら山風に雲消て波さへこほる秋の夜の月

右 海上月

海原やもろこしまても照すとてやまと島ねを出る月影

右 郊蟲

なをさりにまねくお花をしるへにてゆけハマことにまつむしのこゑ

右 同

ぬしやたれと野への緑を人とハハはたおる蟲のこれとこたへむ

冬 二番

左

色かハるあしの末葉にをく露の霜とふけゆく冬ハ末にけり

6 (オ)

右

露霜につれなきからに菅筵ねたけにかもふく松の嵐の

左

風さそふ磯のあしまハこほるらし沖へに鴨の聲さハく也

右

淀川やそれも難波の名にしおハハしハよとめくるゝとし波

羈旅 二番

左

わかれにし人の袖さへ思ひやる草の枕にかゝるしら露

右

6 (ウ)

山陰に庵さす秋の草枕夢よりさきにむすふ白露

左

鴨鳥のうきねたゆたふ波枕さたかにもミすふる郷の夢

右

行末のちかつきぬれハかへりミる都の山のいや遠さかる

述懐 二番

左

世中のさら三やいつくしら雲のうハの空にも思ひなすかな

右

かきおこす人たになくハ埋火のうつもれなからきゝぬへら也

7 (オ)

左

思ひてのなき扉こそ嬉しけれ浮世の塵のたつねいらねハ

右

いけるかひありその海にあま小舟つなきて波にまかせつるかな

物名 八番

左 ほしあゆ

道のへの柳か枝そおらまほしあゆまぬ駒に鞭をわすれて

右 おしあゆ

家つとに手折し秋の色もおしあゆムことにそ紅葉ちりける

左 つくミ

7 (ウ)

人しれぬ清き心のありぬかも岩垣しミつくミてこそしれ

右 はらか

霰ちる小野のしのはらかせさむミ都の人のかりにきまさん

左 つゞミやき

山ひこの聲うちそふる瀧つせの谷のつゞミやきく人のなき

右 しゝたミ

君か代ハとをかにそふるあめのしたたミの竈の烟たゝせず

左 きしのおとり

ゆく／＼も引くらへミん山吹の花咲きしのおとりまさりを

右 とらのかハ

8 (オ)

宮ひとのかハの芹をつみ／＼も長くそいのる君が萬代

左 さハやけ

かねてより思ひしことよいまハさはやけのゝきゝす身をハわひつゝ

右 まかり

秋ハいまかりにも人のとひこかし紅葉ちり敷山のした庭

左 あしかなへ

夢さますおとハ難波のよしあしかなへてハ秋の風ハふけとも

右 なかむしろ

鶯のまとひやなかむしろ妙の雪ふり埋む窓の梅かえ

左 かのと

8 (ウ)

かたおかのとかのニたれし枝ことにはふ蔦かへり紅葉しにけり

右 四十九日

秋山のさつおか笛を峰のしゝふくにちかよる身のはかなさよ

左 ね うし とら う たつ ミ

たへられぬうしとていかて手にとらんうき名にもたつみつの月かな

右 うま ひつし さる とり いぬ る

うましめハうらミつこひつしゑさらにひとりいぬめりゐをたにもねす

雑 十四番

左 天

西へゆく月日とミへてひくかすにつれぬあゆミのありとこそきけ

9 (オ)

右 同

耳鼻をたかほりあけておともなくかもなき空をうらミそめけむ

左 風

青柳のなひきし風の姿かも秋ハちハらにおひミたれぬる

右 同

うきくさの葉末にそよと色ミへて山の梢をふきしほるまで

左 虹

晴か雨の神のゆきかふ通路を虹こそわたせ雲のかけはし

右 露

露ハもと何そととへハ天地の秋を悲しむ涙なりけり

9 (ウ)

左 雲

花とミて帰らんものをよしの山またき梢を埋むしら雲

右 霰

さゝの上に霰なふりそ草枕ミハてぬ夢の帰りもそする

左 山路

黒かりし駒もきさらきのさらに又色かハるまてなつむ山道

右 同

白雪のふりつもりにし老か身のかゝミの山ハこゑまくもらし

左 僧

このもとに一夜のやとをさきくさのミつはよつはに殿造りせり

10 (オ)

右 同

ひろひつめつゝりの袖をいつよりかから紅にそめかへにけん

左 夢

夢こそハ現にまされ夢ならぬ夢もおほき現なの世や

右 同

何により昔の人をあひミつると思へハ夢のむつまじきかな

左 ト

あほたミの草の葉ことにこととひて更に難波のうらのよしあし

右 菴

人けなき山下庵に昔たれ月そこゝろをすミそめの袖

10 (ウ)

左 送別

人やりの旅行君にあらぬわか袖の涙のとまらさるらん

右 留別

立帰りまたあふ坂のたのミこそさすかに人の命なりけれ

左 歎老

秋冬も月にハたへせず花霞よるひる耳に入相のかね

右 傷逝

わかさとを鳴てもすきよ子規こひしき人のことつてとミむ

左 返景入深林復照青苔上

華胥國歌合

このもとの^(マ) 苺の衣をほしわひてあさハ夕日を契りをきけん

11 (オ)

右 燕子樓中霜月夜秋来只為一人長

霜白く月さゆる夜ハ物を思ふわかたためにのミあけやらぬかも

左 晴後青山望臨牖近

遠かりし時雨の山の空はれて緑したゝる夕暮のまと

右 江城五月落梅花

五月やミあやめも見へぬ笛のねに難波の梅のちりたりと聞

左 擬躬恒

初秋の河風涼しわかせこを見まくのほしき比にもあるかな

右 擬貫之

春なれや花さきぬへし足引の山の霞にいさましりなむ

11 (ウ)

左 擬赤人

ぬは玉の夜ハはた寒しむへしこそけさミよしのゝ峰のしら雪

右 擬人麻呂

から衣すそのゝ小萩咲にけりともにきてミしいもハあらなくに

祝四番 擬大嘗會御屏風和歌

左 美尾山 朝日初昇

あかねさし出る日影をミお山やくもりなき世の始なるらん

右 小松原 子日遊客

引つれてけふの子の日の小松原その萬代のかけこのむなり

左 栗田里 家ゝ養蚕

12 (オ)

こかひすととるや葉田の家ことに君かあか裳をたてまつるらん

右 河上里 水月祓

みそきする流の末もかねてしる心そすめるかはかミのさと

左 鏡山 明月清澄

すむ月に過し昔をかミ山行末遠く猶ミかくらむ

右 伊吹山 秋草露繁

君かめくミ玉しく露といふき山さしも草葉に残るくまなし

左 愛智川 水氷聲静

すめる世ハ水も心をそち川やこほれる波のおとたにもなし

右 安川 千鳥群飛

12 (ウ)

君か世ハ行末遠くやす川の鳥もやちよとつくりたるなり

昔の旅

13 (オ)

むかし文章の博士ありけりそかおちに岡の翁と聞ゆるはり

まの國いはのわたりに年へてすミけるきさらぎのころ老木

の桜くちまさりいやましに見まくほしとさうそこしけるさら

てたに年ころおほつかなくいひおもひたまひしをまいてやまう

にさへふししつミ給ふけりと聞ておほやけのしけきわさはさ

ることなれとことしのミかハとてすこしたゆめるおりすくさす

廿日はかりのおこたりまうしたまはりて三月三かの夜

なん難波より舟出しける川舟にてあまか崎よりハあかり

ぬはかせの弟に内記なりける人と文章生ふたり侍にし

たてゝいきけり一人は野氏なりまたひとりハ源氏なりけり

13 (ウ)

道すからの文うたのかたきのれうなるへしそか外には下

部ひとりふたりあやしの物かつきて馬のしりにつかう

まつれりおほやけのおん使に出たつなとはものきらゝ

かに人おほくてかしかましかるへきをもとよりわたくし

のことにしのひたるものからむかしハなにこともかくかろらか

にめやすかりしされはわひしさもおかしさも数まさりぬ

へき今やうハおもりかにてかうやうの旅なんいとかたし

まことやその前の夜なんしたしきかきりおくりきて

川のほとりにをりるて酒すゝめかく哥つくれり

山陽驛路動征鑣分手華川縮柳朝暁日錦袍侵

14 (オ)

露湿晚風驄馬蹴花驕舞濱葛樹潮頭接淡島千帆

望際遙到處春光泉石富好教囊裡滿瓊瑤興隣

並轡群仙幾日掃揚鞭雲際紫駟飛龍山遊履花應

好鶴水垂綸魚亦肥離席窮歛交巨爵詩明惜別引征

衣前程豈道千餘里独恨風光兩地違耻寂

分手春江上長程興不窮輕舟垂柳浪去馬落花風山

碧清煙外海明斜日中壯遊元所願未得與君同

熊外

莫怪滿山雲夜未暗風雨雙起乎與龍西飛帶

縹虎子洲

14 (ウ)

おほかれとさのミヤハとてもうし御旅の君たちハ留別とて

野生

抛却河梁離別情無窮清興萬山青狂夫自笑烟霞

癖吟鞍不遠幾長亭

源生

離堂一任夜冥々降燭清尊聚德星領畧溪山行樂

好未知雙眼向誰青

博士

春酒卜良會送吾西播行衣衝海氣潤馬蹴潤花

輕到處皆親舊相隨是弟兄無端賦采葛忽覺別

15 (オ)

魂驚

内記ハゑひふしてつくらすありけるかふしなからはるかに

西のかたをなかもやりて

三か月にいさ引つれてあつき弓ゐる山のはに

あすハねぬらん舟いつるころなをあかすとて五六人

はかりしたひきてのりぬいとせはきふねにおしこりて身

しろきもせてあけかたに尼崎にあかりぬまた酒のミ

なとして出たらんとするによへないきのつくらすなりぬるを

月ハなをこそ人々にせめられて石筆といふものを

とり出てまきのおくにかいつく

15 (ウ)

江水三十里感歎相送意離酒復互對征馬再三嘶

去々浹辰別何事勞愁思從是春物好名勝到處

開連山肩上聳蒼海掌中視奚囊待我発神遊使

君娛唯恐奇絶境塵筆不得寫

たちわかかれゆくほとひなのすまゐのめなれすめつらか

なるに山や河やとなかめわたり散のこる桜の處々

にミゆるもわさとならすおかしかふと山のミゆるほと

はかせ源生をよひてさしおしへつゝあの山なんその遠つ

おやの君のおんために屍をさらしたる處そしらすや

あるとのたまひければとしわかちてさたかには聞もさため

16 (オ)

さりしかくと聞てうち涙くミテ

松たかミ嶺のあらしの音にのミむかしのあとゝ聞

そ悲しき西の宮といふ處をすきて青海原を見わ

たして博士馬の上にて

征驂出盡西宮驛海色蒼茫樹上開

と口すさミて野生をかへりミてこの上をつけよとのたまへ

はとりあへず

花暗川原細雨未已洗城中満面埃

ないきはいかにミたるそとあれば

風はやミ春海原にちる帆影小田にとひかふ驚

16 (ウ)

かとそみる布引の瀧ハ都遠からぬいまた見さることよ

いさといふほと空かきくもり雨ふり出たり馬も通ハぬ

山路をわけなんこといとかたしやさハれ思ひたちたること

をやミなんやとてはかせを始めとして簀すかたにて

山の細道をたとりゆくに雨もいたくはふらすなり

ぬ瀧ちかくなるまゝに山のはらに家るきらゝかにミゆ

しろきついひち瓦ふきのくら水碓の屋なと思ひか

けぬさまハかの桃の源にやとおとろくかくハしていきつ

きたりけにふかくわけたる山のかひありて聞しに

すきて見處おほかり

17 (オ)

はかせ

布引のたきのしら玉なかくし
ふしのことのはの数にとらまし

ないき

雲井より落くる瀧のしら玉は
天の河原のさゝれ石かも

野生

山姫のそらにさらすと音に聞て

いまころきつれ布ひきの瀧

花あるころなればゆきかふ人らさもなき宮寺あるハ

17 (ウ)

里人のつくり出たる何くれとなそめくあたり處せく
つとひたりやこの瀧ハまことに見ところありて哥にも
とりてより讀たるをこの人々の外にいまた誰かハきたる
あさましとおほひて内記

花にほふ日影にさらす布引の瀧つ心をわれこそ

ハくめ湊川に楠中將のつかあり源生

ほそ道にぬれそほちつゝたつねこし昔しのふ

の草の露けさ内記ハことに涙おとして

日にかさす南の枝のかれしより世はとこやミ

(朱筆点は見せけち)

やゝとなりまさりつゝ野生もかくなん

18 (オ)

落かくる日をかへしけむ玉ほこの道ふミならし

とふ人のなき博士ハ文さくり墓祭し給ふけれとわつ

らハしければかかすこよひハ福原にとまるかのまれ國か民のわつらひを

もかへりミすさつき出したるあたりなりこゝにあひしれる人ありとひ

きて物かたりす五日にはつとめて出て名にしおふ須磨の浦を

なかめわたるに空くもりて島の面影おほつかなきほとなれと

海の面のかう／＼と青ミわたりたるハ常よりもまさりてミゆ

誰にか

淡路島あはとみわたすミるめさへ霞こめたる春

の海つらかのあひしれるか子酒くたものなとさゝけさせてこゝ

18 (ウ)

までそ送りきける濱邊におりてさけのミかれるくひなと
す月あるころならハこゝにくらして夜ニともになかめたまふら
んをくちおしきや今やうの須磨徂といふものにさらしな
の月ともになかめあかさんとうたふハいかにそやこの須磨の
浦そまことにならふかたなきをまほならずかくいひけちたる
いとくちおしきやさらハいかてよからん内記に引なをせと
いひければすまといふも浦の名あかしといふも浦の名月
もまる屋のすまゐにあかしかねたるうら人かくもやとてうたひ
ければミな人けうしあへり岸のかこの屋に里人あつまり
て酒のミゐたるに内記この哥をかいつけてやりけるこれなん

19 (オ)

やんことなあきあたりにてけうせさせ給ふそうたひて酒すゝめ
よといひければ里人らよろこひまとひてミな／＼こゝにきてぬか
をつくあやしの山かつの處取からにさふらふやまと哥な
らハ聞もおよはすさるハ今やうのひとふしも處の名のいり

たるをあき人のたよりに都にあるかきりならひ傳へて心やりにし
けるをいまおしへ給へることはなんことにめてたきをいまたしり
さふらハすこのかしこまりにおまへにぬかをつくなりよくも
そ都人のめくりあひたまへるかな人まろの明神のおんめくミない
るへしとそむかしもいまもひな人ハすくよかにまめなりかしない
きハたへすはしり出て松陰にわらひたふれてしぬへくあり

19 (ウ)

けるさてそしれるか子にわかれてゆく内記のいときなきより

(みせけち)

この道ハふミならしてしを十年はかせ見すなりにける翁
子濱といふ處にて松の緑の昔にかはらずめてたきをミて

あさミとり松ハいろそふ春雨のふり行われそわひ

しかりけるなをゆきゆけハあかしの浦となんすへてこのあたり
ハあやしの浦人のすまるなるそミすめく竹すたれかけわたし
たりむかしよりさすらへひとのおほくすミつきたるその
なこりとそ人のいふなるけにめつらかなるさましたるものかな
いまもさハよしある人のかくそ一處にもあるらんいかにおも
ふ人のこひしかるらんなどあやなくあハれそおしはかり給ひて

20 (オ)

なきくらしおきてあかしの浦人はミるめをなミにしほたれ
ぬらんまさなき心あてなるやこの夜ハかこ河といふ處にやと
りもとめて枕とりよせて足をすミさまにやりてかしらはかり
ひと處によせてうちかたらふそかの里人のなこりおほえてなを
わらひあへる今やうのこと葉ハわつらはしけれと心のとやかなる
ふし／＼あるものなりこれをからうたの文字にうつしたらんハ
いかならんといふ野生こゝろミにとて飛鳥川を

決彼飛鳥之源陸此研石之淵憂腸号寫不盡微

命号不期昏

墨田川を源生

20 (ウ)

離故丘号遠未暮度号墨之水聘京鳥号借問生

死号我所思

はかせうち聞てわれもとて

珠浦秋風号波濤撼枕号藉袖袂号我独臥夢不

成号夜又夜

これハ心つくしなりけんかしかくいひ／＼てねにける内記ハなにやら
んうめきたまひけるかまゝにいひきとなりぬ六日の暮つかた
にそいほの湊にはつきたれかのおきないつしかといさり
出てひさしくあひ見さりつるおほつかなさなと聞へつゝそよるこほひ
たまひたることはりにそこのはかせの父はこの國より出て

21 (オ)

朝につかへたまひたるなれはうちとのしそくたゝこゝもとにのミ
ありてよるひるおほくいきつとひたりおとななとハねひすき老
まさるもあれとめかへして驚ろくはかりハあらねとむかしミし
めとものこよなそとゝのほりてものはちかましけなるをんなお
しきおとことなりてうちなミゐたる名のらすてハ誰とやハしらん
といひさはきたまへるもわかかしらにふりかゝるゆきハしらすかし
見もしらぬをうなの老たる翁の手をひきをんな子にまな
酒さゝけさせて都のかたのまろうとそたてまつらんとてしき
りにぬかをつくあり何者そとふによしとて舅姑にけう
ふかきものにそありけにいやしき馬ひきのめなるかおへと

21 (ウ)

うせしより世わたるわさなくいやましにまとしかりけるを
このをうなおりぬひやとわれわさして舅姑をはくゝみ朝
夕よくつかへまつりつゆ心にたかふことなしちかきわたりの人
あハれかり（原文マ）なけきけるをこのはかせいたうものめてする人
にてさいつころ都にて聞つけておのれハさらにもいはす友人ら
をかたらあひてしろかねこかねぬのなとそくはくおくり給ひ
けるそのかた萬里まかすなりはかせ盃とり出てなをこと
のよしたつねなとしてかへらぬこのむすめも母に似てけう

曰そこ

ある者とそ十一月ろくの墓おかミにとてゆく博士のあねなる

妹なるいとこなるおはなるそか子なるミなつれたちたり山にまうて

22 (オ)

きて木の葉かきはらひ水そゝき拝ミ給ひたるそ先たつものハ
涙なりはかせ

苔むしてわかちかねたる石ふミをあらへは袖の涙

なりけりなき

むかししのふ涙ハ袖にせきあへす苔の下にもしミヤ

わたらんあたらしき塚の四もあるをこれハたれかれはそれ

とさしおしへたるをまこととおほえすけに内記

なき数のそふにつけてもかなしきハありとハしらす露のこの

身をあねの君なきの袖をとらへて

ともにミし人ハしるしとなりぬなりわれはたいたく

22 (ウ)

おひにけるかな命をかきりしはたエて内記もともに涙を
ひとめうけて君たちハなき世までもこゝにこそ土偶人の

たかひのことなをいとめてたし朝にひまなき身ハ都にてしぬ
へくあれはこの教にはゑこそいらねなを命のうち
こそとて

契りおきてまたもとひこんふる里の桜の雪とふり

つまぬまにこの湊に親にけうふかきをうなあり八十
はかんなる父母のまとしくすめる道のほと二十町はかんなるを
雨にも風にも日ことに通ひてくひ物きるものはくれたるもの
をさへにとりまかなひて後そわか屋にはかへるいつもこの

23 (オ)

時にゆきてひつしさと帰り十年あまりひと日もたゆ
むことなし今ハ母ハうせて父九十餘なり夫もなくなりて
そか子ん家のわさして世をわたるはかせこのをうなを
ミんとて十二日例の人ゝともなひてゆくけふも親の家にゆき
ていまた帰らすといふほいなくおくりものゝめおきてかへ
りぬまたの日なんかのをうなまいりかしこまりてあひ見た
まひしましたさい村といふ處にめしるあり子もなくはらか
らもなしけに妻なる夜ハ麻を手まさくり昼はめしるの
手を引てかなたこなたよろほひありきてよねをこひて
世を過しける二十餘年おなしさまなりこれハなを

23 (ウ)

さりのかたいめのやうなるをそのさまのいとまめまめしきか
あハれなりとて国の守よりよねたはひたることあり博
士の道に行あひ給ひたるにはものなとらせたりおなし處
に照圓寺と任持の僧の弟に教順か妻なむ世にためし
すくなきまめ人にそありける教順かわかき時たに庵にいきて
すミけるその時ゑたる妻なりさいはひなくさすらへて難波に移
りすめるいとまとしかりそれハはらからなとハいさ帰りね外によすか

もとめてよといふを聞もいれすミとせはかんありてこの教順物のけ
さへそひてにはかにつれてふる郷にくたりぬいと／＼おとろしき
ものゝけにてよりそふ人もなきをこのめなんよるひるはなれ

24 (オ)

すさるはうちかしりあるハふミさいないミてしぬへくあること
たひ／＼なるをつゆうらミたるけしきなし兄の僧ハ心つよきもの
にてさしもおもひたらず寺のかたへにかたつむりの屋のや
うなる庵をつくりてもものゝけひとりかくひものを日ことにお
くる妻とふたりの子とはたれかハしらんさるは絲をくり
布をおりなとしてすくしけるくひものなとハさら人にのく
ふへきものにもあらずそれたになき日もありとなんはら
からハいやましにかへれとせむるをかくおとろしきものゝけを
たれかハうしろミ聞えんさなきたに帰らしとちかひてしを
いまは命をかきりとてそやミける冬のさむき夜しも物のけは

24 (ウ)

ありはたかにて庭にたゝすめハ妻もおなしこと衣ぬきて
立そひるを里人見とかめていさめけるものゝけハねちつよき
ものにてさむさをたにしらぬなれハいかゝハせんこの人のな
てうさるわざあらんいたつきのいるへくいとおろかなるわざ
なりといふにそれをしらぬにしもあらねとおつとのさむき
庭に給へるをひとり内にゐてあたゝかにあらんハわか心とてゑ
せずとこたへけるその心もちひ皆ミなかうやうなるけにめつら

かなるまめ人かな女のためにしつへきことそ博士
また例の人ゝ引つれていきたりかのかたつむりのやを

見^いれたるにしきこもさへひとへむしろをしきたり人ハあらず

25 (オ)

こゝかしこたつぬるに小河におりて葉をあらふ女あり髪
も衣もかたいめのやうなれとつらつきのきよらにあてやか
なるかれにこそとよりて問にそなりけりやゝとよひとりて
庵に帰りあるやうをとひきくにほと／＼のとやかにうちかたら
ふにミな人涙おとしておくりものとり出るほとものゝけ婦
りにける人おそれるものゝそなりと聞てあいなくて帰り
ぬかの物かたりのついて丹波国ハ境をへたてゝ父のたよりも
ひとゝせにふたゝひハせずとなけきけるを源生のいとこにかの國
司につかへたるあり九鬼氏なりしれりやといふにまことさるおん
なからひにやその父の君ハおのれか父と心しれる故になん子なる

25 (ウ)

ははらからか文よむ友にて日ことによりむつひ給ひし今ハ父
の君ハなくなり給ひしにこそとて涙くミたりさるハそか方に父の
たよりハ常にもあれハいて致書郵せはわかかたに文こせよと
いひければよろこほひて後にそ文かきておこせたるこたミハ
かなれハかくはかり教あるものまめなるものに数おほくあひミたる
ことやとはかせのよろこほひ給ひたることはりなるやおほちの墓
のあか月の郡にあるを拜ミにとて十五日のつとめてふたりの生に
國つこのしたしき三人つれていきけりなきもおなしさまにい
くへけるを長谷のわたりに母かたのおほちの墓あるをおかまん
とておなし日しも引わかれてゆくとそしかるわさやと人ハいへれと

26 (オ)

たらちねの家つとハこれにまさるものやハあると心ひとつに思ひとり給ひ
てひとり立わかれたるいとあはれなりや上津といふ處にしれる人あり
そか子なる岡の翁にもまなひしけるこれとつれてゆく美作にも
しれる人ありける博士のくたり給ひたりと聞てそか子を使におこ

せたるその帰る道なれハこれもつれたり上津ハ長谷にほとちかき
處なれはそこにとまりぬ山のかたそはに家つくりおもしろく
したりいたう心にしミテ

偶為山中客便得山中趣青山與我静泉聲滌我憂

青山窓外聳平田左右連一抹暮烟起俱在有無間

愛此山中宅山水為已有出東嶺上亦照茅齋裏
月

26 (ウ)

この君ハいたうふるきをめてしたふほんしやうにて韻なとも
いにしへのをとりていまの世にはめなれぬことおほかりあめなかの
はかに詣て

ありし世をしらてすきこしなき跡のしるしはかりを

見るそ悲しきたらちねの遠くへたゝりてなつかしうつきせず

あハれに思ふたまへる御心むけを

身にそへてともになくねをうは玉の夜の臺にいかて聞

えむこれより帰るへかりけるをかのミまさかなるかあひ見まくほしき
にそ其子とつれて山路をたとりつゝゆく杉か坂をこゆはり

まとミまさかの堺にて建武のみかとの塵をかうふりてこゑ給ひし

27 (オ)

跡なり暮つかたに瀧もとの里にいたりぬかのあひしれるか家なり
このあるしハ博士の父にもまなひしたりしさへかしこくけうふ
かくて旌表をゑたるものなりあさなを子華ときこゆその
子もその博士にもまなひたりしよもすからかたらひあかしてたゝ
ひとり立帰りまた上津にとまりて十八日いほの湊に帰りにける
はかせハふたゝひさきにかへりたまひぬるか赤穂のことハ聞もらしつ
廿日にハあほしといふところにミないきたり湊の川しも百町は

かりかほとなり柴つむ舟にのりてくたるひんこ里ハ野ひろく
山遠し朝霧のたへまに岡への松處ゝにミゆ右の峰ハ山の
すそなり一町はかりに山をみる所もあれとおほかたハ山の

27 (ウ)

根をこきめくる山をきりたらむやうなる高き峰に松なとさ
かさまに生ておちかゝりたるおほかり風もなく散花のおの
つからに舟のなかにおつるもあり山川のきよきなかれのさゝやかなる石
の上をはしる瀬ゝのさゝ浪ハ氷をゑりたらんやうなり底ハひら板
なる舟のこきとほれハ玉をかきならず音なんしけるまたふかき
處ハ青ミわたりて鯉なとおほくあつまるとそ都ちかきところ
ならましかはやかた舟に絲竹の音ハたへまあらしを人ゝ韻わ
かちて哥つくれりける

水 野生

蒼岬與白氷奇絶奪丹青幽賞欲凝目舟輕不可停

28 (オ)

草樹倚懸崖盪漿廻其趾空翠染我衣飛花墜我屐

源生 内記

擊汰亂山影白鷗避舟起舟過波紋定鷗泛山樹裏

博士

載酒扁舟下急灘急灘回轉幾重巒山色水容評未偏嵩人已報

是羅干

内記ハまた不船人をこととはとて

載薪樵号水路熟夏日熱号冬日塞此日何日号遇公子續窃

窈号其鬼神水益清号山益青花益妍号我益老懷公子

28 (ウ)

号不得語独疑竊并心之憂

まこと舟人の口よりかくいひ出たらんハ誰もく衣ぬきてかつけまし
をゆきつきてハまた海舟にのりうつりてなけ石といふを見にゆく
海の中にいとおほきやうなる石数しらす島のことあつまり
たてり誰にか

あまかける神の披けん石なれやうちよする浪にゆるかて
もなきこの石の上にて酒のミうたひあそふあはさぬき島く
みゆ沖にはあまの小舟島のこと釣するありつなてひくあミかも
おほかりまた誰にか

いさこゝに釣するあまのすて小舟なミにまかせて世を

29 (オ)

やへなましうらやましけにおもふもやすけなきうれへハはたし
らさかしこゝのつかさなりける人このころ任はてゝのほらんとす
なによきけちや得たりけん勢まうになりて友なひきたるあない
せる里人岩かとうちよせたる藻をひろひてこれなんこむふの里
といふなりこれもて酒すゝめたてまつらんとてもて出けるかの前司の
前におきて

うちよする浪のもくすをとりく君かさかへのかすと
りにせむ前司いたうけうしてとりくめくる盃の数しらすなり
ぬさすかにとしころすみなれたる浦のあまの
もしほたれてわひつゝすきし年月もよそのかことにかこたれ

29 (ウ)

ぬらんと心のうちにハ思ひけめ暮ちかくなるほと風かはりたり
浪あらしもの道にはゑしもといひさはきてちかき磯にこき
よせて細道をたとりつゝ塩やく處なと見てかの里人の家にとまる
あけの日室津にわたりて帰る廿一日河邊に出てあそふ例の

人々の外におほくともなひたり網ひろけて魚とるもあり竿も
ちてつるもあゆハまたいとちいさしますのいはほらす人くちおし
かりけるこの國に饑饉うちつゝきて民のわつらひありとて制ありて
なへてよききぬをきるることなかりきさるハをんなこなとハいと
わひしきことにいひおもひけるされとそれなからにそうそきつれ
たり髪あけたるすかたまへつかたはいとひなひたるをつまは

30 (オ)

さしもあらず都のかたにあるとあるこそミなうつしとりていまめかしう
ひな人とおとしいふへきかたさしもなし内記うちミやりていまは
外にうつすへきものなしたゝ心のあたなるのミなうつしそとのた
まへはほゝゑミつゝつゝましさに松陰にひきいりけりこの日なん
空のけしきのとかにていとけふありけりとなんされとかきつくへき
ことはなかりき廿四日に帰りのほらんとてとくおきてものしたゝ
めなとするに馬のはなむけせんとて處せくいりきたりかのやまうも
このころうちつゝきておこたりさはやきたまひぬるを見おきて
うしろめたうハあらずかしいま四年たちは今やうの人の
するよねの賀なるへしその時にはかならずなと聞かはしかへり申

30 (ウ)

したまふにあハれにおほしつゝけて老木の桜またもなとよミて
おくり物にしたまひけるかへし
またこゝに君かよはひのやそちあまりやかてとつけて出たらん
はやよろこほひ給ふものかうさすかにゆくさきのさためかた
さにうちしめり涙を袖にかけなからないきはいかにと聞
たまへは
おひぬるも花さきまされまたもこん春を契りて帰るう
くひすおきなうちわらひて偽おほきものにもあらぬを哥の
心おほつかなしさるハあけの年ハかならずとひきますやとさい

なミたまへハあけの年もその次々の年もいまより後の春ハ

31(オ)

いつれもこん春とこそ申へけれといひければまた例のさるから
ことをとてこれも／＼わらひ出たるいて汐に棹さしてたち出る
いと名こりおしとてをんななともミな戸のくちに出たり誰にか
ありけむちいさきをんなこの聲して

めぐりあはんほともしらしを風そよく小篠の上を露

なわすれそ人ゝいひつきたりけれハいとおしかりてかへし

なとせまほしけにかへりミしつゝ出給ふにおくりの人おほく

ものいひさはきたれはせずなりぬ都にハいく日か帰りつきけん

はりまの人はしらす

辛卯の年春季春

31(ウ)

檻泉三箇左壅右涸理債逐人得一莖禾屈直委心寄

半行書奢者不久板木作工水驚樹春自古為都欲求

其郡従和仲欲知其國問長徂

附記

平成九年(一九九七)夏に原本に接していた。大学の
根本理念が問われる昨今、私の内の答の^私の答の一として、当資
料を翻刻することとする。京都大学蔵本などとの異同
等は次に期す。

当本は大阪市立大学蔵の貴重書閲覧の許可を賜わり、
今回の公刊に際し、同大学学術情報総合センターに
お世話戴きましたこと、爰に深謝の意を記します。